

学位論文要旨

教育実践における共同性に関する教育方法学的研究

福田 敦志

I 論文題目

教育実践における共同性に関する教育方法学的研究

II 論文構成

序章 研究の目的と方法

- 1 共同性をめぐる問題状況
- 2 研究の目的
- 3 先行研究の検討と研究課題の設定
- 4 研究の方法と論文構成

第I章 教育実践における共同性の原理

第一節 教育実践の原理としての共同性への接近

- 1 教育学ならびに隣接諸科学における共同性の位置と意味
- 2 教育方法学および生活指導論における共同性の位置と意味
- 3 教育実践における共同性の原理的把握の視点

第二節 教育実践における共同性の原点としてのペスタロッチー

- 1 「歴史的ペスタロッチー」への挑戦と共同性の再検討の気運
- 2 ペスタロッチー教育方法思想の標語化と偶像化
- 3 『リーンハルトとゲルトルート』改訂の試みと教育実践構想の再構築

第三節 シュタンツ教育実践における共同性の再検討と教育方法の可能性

- 1 シュタンツ教育実践における「共同体」構想の「発見」
- 2 シュタンツ教育実践における共通課題への挑戦
- 3 ペスタロッチー教育方法思想における共同性の位置と意味

第II章 教育実践における共同性の創出と「ケア」の展開

第一節 子どもの生活現実の論理としての「同化」「排除」「忘却」

- 1 子どもの生活世界の政治化
- 2 「自己定義」の収奪
- 3 子ども社会における民主主義の文化の創造

第二節 「子どもの声をきく」ことと「ケアの倫理」

- 1 「子どもの声をきく」ことと集団づくりの接点
- 2 「ケアの倫理」に基づいた社会構想と集団づくり
- 3 「悲しみの経験」と集団づくりの課題

第三節 「言葉を奪われた子ども」と情念の政治

- 1 「悲しみの経験」を無効化する自己責任論
- 2 情念の政治的位置づけとその作用への関心
- 3 「自己」を語る言葉と「公共」を語る言葉の接続と生活指導論の課題

第Ⅲ章 公共性の創出とインクルーシブな社会構築の論理

第一節 親密圏と公共空間とのあいだ

- 1 民主主義の実現と「内的複数性」
- 2 生活指導論における親密圏と公共空間の位置づけ
- 3 実践課題としての共通課題の意識化

第二節 共通課題の意識化と公共性

- 1 「悲しみの経験」とその政治性
- 2 「否定のなかに肯定をみる」ことと「悲しみの経験」
- 3 「悲しみの経験」と共闘的指導

第三節 インクルーシブな社会構築に向けた個人指導と集団指導の統一的展開

- 1 子ども社会の現実とインクルーシブな学級への契機
- 2 「特別なニーズ」に応答することと個人指導の視点
- 3 インクルーシブな社会を形成することと集団指導の視点

第Ⅳ章 共同性を原理とする実践知の構造

第一節 共同性と公共性を統一する教育方法の視点

- 1 差異の承認と「共通課題」の発見
- 2 子どもの自立課題と集団の発展課題とを媒介する実践課題の構想
- 3 「共に生きうる」社会づくりへの子どもの参加

第二節 子どもたちの発達・自立の保障と自治の指導

- 1 子どもを理解することと指導することとのあいだ
- 2 実践課題としての幼児期から少年期への発達保障
- 3 発達保障としての自治の指導の視点と課題

第三節 共闘的な「指導－被指導」の関係構築と子ども集団の質的発展

- 1 子どもの「傷」と少年期の回復
- 2 「指導－被指導」の関係における共感と共闘
- 3 「共通課題」の発見と子ども集団の質的発展

第Ⅴ章 共同性を原理とする教育方法改革の可能性

第一節 地域で生きる生活者を育てる学校の構想

- 1 インクルーシブな学級・学校づくりと主体形成論

- 2 インクルーシブな社会を構築する知性の形成
- 3 地域で生きる生活者を育てる教育課程編成の視点

第二節 学校教育と学童保育とのあいだ

- 1 市場化する「放課後」と子どもの生活
- 2 「複数の生きる」ことと子どもの発達保障
- 3 生存権と発達権を保障する拠点としての学校の創造

第三節 「教育と生活の結合」と「教育と福祉の統一」とのあいだ

- 1 「生活者」としての子どもの発見と「ケアするーケアされる」権利の保障
- 2 公共空間への参加と共同性
- 3 「共に生きる」社会構築の論理

終章 本研究のまとめと今後の課題

- 1 本研究の到達点
- 2 共同性を原理とする教育方法の可能性
- 3 開かれた展望と残された課題

Ⅲ 研究の目的と方法

本研究は、教育実践の原理としての共同性の内実と、この原理に基づいた実践を構想する論理を明らかにしようとするものである。その際、ケアや公共性を鍵としながら展開される今日の教育実践のなかに共同性の原理が貫かれていることを浮かび上がらせることで、共同性を原理とした教育方法改革の展望を開くことを主たる目的とする。

今日においては、「ケア」と名づけずにはいられないような働きかけを行いながら子どもたちへの個人指導を展開しようとしたり、自治の指導と呼ばれている行為のなかに「公共空間の形成への参加」を見だして意識的な働きかけを集団指導として展開しようとしたりしてきている。これらの実践的な問題提起は、互いの存在を否定することなく共に在り続けることを可能とする世界とはいかなるものであり、そうした世界をどのように立ち上げることが可能であるのかを問いながら、教育実践における共同性の問題を追求している。

また、生活指導論の文脈のみならず授業論の文脈においても、たとえば「学びの共同体」や「批判的学び方学習」の提起に典型であるように、1990年代以降は共同性の問題が自覚的に追求されてもいた。こうした挑戦は、子ども社会の政治化に対する問題意識に基づきながら、知を再審にかけ社会的かつ文化的な実践に共同的に参加していくことを子どもたちに促す試みであった。ここでもまた、教育実践における共同性の問題が追求されていた。

さらに隣接諸科学に目を向けても、たとえばフェミニズム政治学の立場から「ケアの倫理」に着目した議論が展開されるなかで、障害や病気等で「参加」が「不可能」とみなされる人びとが排除

され、そうした人びとの「ケア」を担う人びともまた同様に排除され続けてきた歴史が明るみに出され、いかなる社会を構築すべきかが共同性の在り様として問われ始めている。この議論は、「公共空間の形成への参加」をインクルーシブに実現することは可能か否か、可能であるとするならば、それを実現する教育実践を構築する論理とはいかなるものであるのか、という問いとなろう。ここにも教育実践における共同性の問題を議論する必然が浮かび上がってくる。

しかしながら、教育実践を構想する上で共同性が鍵となるであろうことは明らかであるものの、その共同性の内実はいかなるものであり、その概念がたとえば「ケア」や「公共性」といった今日の教育実践の鍵となっている概念とどのような関係構造をもつのか、さらには共同性がどのような指導構想を導くのかについては漠然としたままであり、明確になっているとは言いがたい状況にある。

本研究はこのような課題意識に基づいて、教育実践の原理としての共同性の内実と、この原理に基づいた実践を構想する論理を明らかにしつつ、共同性を原理とする実践の指針を浮かび上げようとするものである。

この目的を果たすために、まず教育実践の原理としての共同性の端緒が明確に描かれているペスタロッチーのシュタツ教育実践の分析を行い、その実践構想のなかに、共同性を原理とする教育実践の原点を見いだす（第Ⅰ章）。この考察をふまえつつ、「ケアの倫理」と教育実践の関係、とりわけ困難な課題を抱えた子どもに対する個人指導の在り様の分析を行ない、個人指導もまた共同性の原理に基づいて展開されることが重要であることを明らかにする（第Ⅱ章）。こうした個人指導と並行して展開されるべき集団指導をインクルーシブな世界を創造していく試みへと接続し、「公共空間の形成への参加」に子どもたちを誘っていくためにも、集団指導が共同性の原理に基づいて展開されることが重要であることを明らかにする（第Ⅲ章）。これらの個人指導と集団指導の統一的展開を具体的に構想し、実践していくための知の構造を整理した上で、一人ひとりの子どもの発達を保障する自治の指導の在り様を導き出ししながら、一人ひとりの自立を保障する子ども集団の質的發展の在り様とそれを導き出す指導の論理を明らかにする（第Ⅳ章）。以上のような考察をふまえつつ、地域ぐるみでインクルーシブな社会を創造する担い手として子どもたちを育てようとしている学校の挑戦や、学校と学童保育との関係の在り様を分析しながら、共同性を原理とする教育方法改革の可能性について問題提起を行う（第Ⅴ章）。

Ⅳ 論文の要約（第Ⅰ章～第Ⅴ章の概要）

第Ⅰ章 教育実践における共同性の原理

シュタツ教育実践を歴史的な文脈のなかに位置づけて再検討することを通して、「教育的限界状況」のなかを生きていた子どもたちを人間として育てていこうと決意する際には、子どもたちに気を配り、身体のニーズに応答するような「ケア」が重要であることが改めて浮き彫りとなった。だがペスタロッチーはそうした「ケア」実践に終始するのではなく、当時の公共の課題が自分たちにも共通する課題であることに気づかせ、子どもたちをその課題克服の担い手として育てようとし

ていたのであった。すなわち、共に在り、共に生きることを追求していくためには、教育実践のなかに公共性を呼び込むことが重要であることをペスタロッチーは端緒的に示していたのである。

共に在り、共に生きるためにこそ、「ケア」実践を通して安心と信頼を醸成しつつ、社会で生じている問題事象を公共の課題に変換しながら引き受け、共に乗り越えようとしていくことをも、教育実践における共同性の原理は含みこむのである。それこそがシュタンツ教育実践の本質であったのであり、共同性を原理とした教育実践の原像なのである。

第II章 教育実践における共同性の創出と「ケア」の展開

「ケアの倫理」に基づいた個人指導の展開にあたって、とりわけ悲しみの感情を集団づくりの課題として引き受ける教育方法の在り様が、最も重要な論点の一つとして問われている。なぜなら、困難な「課題を抱えた子ども」たちは「悲しみの経験」を語りながら自らの内面に潜む「もう一人の自分」を自覚していくことを、この国の教師たちは実践的に確かめてきたからである。

他方で「悲しみの経験」の語りは規範的期待を呼び起こし、子どもたちの関係を「なかま」の方へと方向づけていく力をもつものとして構想しうることが明らかとなった。ここから規範的期待に応え得る集団づくりの必要性が浮かび上がる。その際の視点として、「自己」を語る言葉と「公共」を語る言葉を接続する指導が求められるのである。

第III章 公共性の創出とインクルーシブな社会構築の論理

最も困難な「課題を抱えた子ども」が公共空間へと現われてくるためにはやはり、その子どもにとって「生への配慮／関心」によってつながっている親密な空間が必要不可欠となる。このとき、きわめて私的な事柄によってつながっている親密圏と、共通の課題を立ち上げていく公共空間とはどのように関係づけられるのかが新たな課題として浮上する。

この課題を克服する鍵は、最も困難な「課題を抱えた子ども」の「悲しみの経験」を「共通課題」として意識化していくことにある。そのことは、論議の中心として位置づけようとする子どもの「悲しみの経験」を惹き起こしたものは何なのかを共同で明らかにしながら、その論議に参加した者たちがそれぞれにおいてどのような感情を抱くことになるのかを交流していくことを通して可能となる。

ここで最も困難な「課題を抱えた子ども」の「悲しみの経験」が今あるものとは異なるもう一つ別の世界を創りだしたいという願いを秘めているがゆえに、子どもたちの規範的期待に呼びかける可能性を含む点が明らかになった。

第IV章 共同性を原理とする実践知の構造

前章までの考察を通して浮かび上がらせてきた実践知は、自立へと誘う「ケアの倫理」に基づいた個人指導と、その歩みに関して批判しながら援助するように参加していく子ども集団の質的發展を導き出す集団指導とを中心にし、この個人指導と集団指導とが統一的に展開されていく場として、公共空間での出会いを実現しうる種々の活動、つまり自立への過程を共同の営みとして具体化する活動の指導が土台に据えられ、これら3つの局面の指導を媒介するものとして、「共通課題」を意

識化しその課題の克服を模索する指導が位置づいているという構造にある。

こうした実践知に基づく教育実践を具体的に展開する際には、子どもの発達課題を認識することとその課題に挑戦させていきながら自立を保障していくことを統一的に把握しておくことが肝要となる。このとき、幼児期から少年期へといたる発達課題への挑戦を促し、かつ子どもたちの少年期の充実を図る集団指導と、少年期へと至る過程のなかで、あるいは少年期の子どもたちが作りだした世界のなかで傷を被らずにはいられなかった子どもに対する「ケアの倫理」に基づいた個人指導を展開しつつ、同時に共感的でありながら共闘的でもあるような指導－被指導の関係の成立へと誘う集団指導を同時に展開させていくことが鍵となる。

第V章 共同性を原理とする教育方法改革の可能性

共同性を原理とする教育実践の一つの典型例として、ドイツ・ブレーメン州にある **Roland zu Bremen Oberschule** での教育実践を取り上げ、考察を行った。そこでは、学校における多職種協働の原理としてだけでなく、子どもたちが学校での生活を自治的に展開していく際の原理として、さらには地域社会において共に在り、共に生きる生活者を育てる教育課程編成の原理として共同性が位置づいていること浮かび上がらせた。

また、子どもたちに充実した少年期を保障することが鍵となる以上、その実践は必然的に学校の枠を超える指導構想をもつことが求められる。このことを踏まえ、子どもたちの放課後の生活を保障しようとする学童保育が積み重ねてきた実践と理論にも共同性を原理とする実践知の萌芽があることを見いだしながら、学童保育の場で子どもたちと指導員、保護者が共に生きるに値する地域社会をつくりだすための実践視点を浮かび上がらせた。

こうした発展的な議論を踏まえて、子どもたちが大人たちと共に、自らが生きる生活を共同してつくりだす営みのなかで互いに生活者として育ち合っていくという、今日的な「生活が陶冶する」実践の在り様を教育方法改革の可能性として提起した。

V 研究のまとめと今後の課題

ケアや公共性を鍵としながら展開される今日の教育実践のなかに共同性の原理が貫かれていることを浮かび上がらせながら教育方法改革の展望を開くことに挑戦してきた本研究の到達点として、以下の5点を挙げることができよう。

第一に、深刻な境遇のなかで困難な課題を抱えながら生きている子どもへの教育実践においては、その困難な課題の背後に「共通課題」を見だし、共に在り、共に生きる方へと子どもたちを誘うことを実践の原理として位置づけるべきことを明らかにしたことである。『『教育学的境界状況』のなかを生きる』、すなわち、時代の課題に直面し、それに翻弄されながら生きる子どもたちと向かい合ったペスタロッチーは、自らの実践に公共性を呼び込むような共同性の原理を位置づけていたと考えられるが、まさにそこにこそ、共同性を原理とする教育実践の原像が見いだされるのである。

第二に、とりわけ困難な課題を抱えた子どもに対する個人指導に際して、その子どもに刻み込まれた「悲しみの経験」を、子ども集団のなかに規範的期待を呼び起こすことへと結びつけていく指導が肝要であることを明らかにしたことである。

第三に、共同性を原理とする集団指導を構想する二つの視点を明らかにしたことである。視点の一つは、困難な課題を抱えた子どもが公共空間へと現れることを保障するために、その子どもの「生への配慮／関心」に基づいた親密圏を子ども集団のなかに生み出していくことである。もう一つは、その親密圏の支えを前提としながら、「課題を抱えた子ども」に「悲しみの経験」を刻印した何ものかを明らかにする論議を行い、その子どもに「悲しみの経験」を刻印した不正義の現実を「共通課題」として意識化させながら、その何ものかによってもたらされている発達疎外状況を乗り越え、その現実を変えていく活動を構想していく実践として展開していくことである。

第四に、共同性を原理とする実践知の構造を明らかにしたことである。その構造は、「ケアの倫理」に基づいた個人指導と、批判と援助を鍵とする子ども集団の質的发展を導き出す集団指導とを中心にし、この個人指導と集団指導とを統一的に展開していく場としての活動の指導を土台に据え、これら3つの局面の指導を媒介するものとして、「共通課題」を意識化しその課題の克服を模索する指導が位置づくというものである。

こうした実践知の構造は、子どもたちの少年期を充実させていく集団指導と、幼児期から少年期へ、さらには思春期へと至る過程のなかで傷を被らずにはいられなかった子どもに対する「ケアの倫理」に基づいた個人指導とを、それぞれにおいて共感的でありながら共闘的でもあるように展開していくという実践の指針を導き出すのである。

第五に、共同性を原理とする実践知の構造を手がかりとすることで、「教育と生活の結合」と「教育と福祉の統一」とを架橋する教育方法改革の可能性を提起したことである。

以上の点を導き出した本研究は、インクルーシブな社会を創造する担い手として子どもたちと共に育ち合っていく学校ならびに地域を創造する教育方法を導き出す視点を明らかにし得たと考える。この視点は同時に、学校教育に携わる者のみならず、共に在り、共に生きるに値する学校や社会を創りだそうとしている児童福祉や社会福祉さらには司法福祉や医療に従事する者が協働する際の、根源的な思考形式を構築する可能性に開かれている。

以上のような可能性を具現化していくためにも、Roland zu Bremen Oberschuleにおける教育実践の全体像を明らかにしていく研究と、この国の地域生活指導実践の展開において試みられている、多職種協働による自立を援助する実践に対する調査研究とを重ね合わせながら、共同性を原理とした学校づくりと地域づくりを「串刺し」にする教育方法の解明もまた、重要な課題となろう。

本研究では、共通課題の意識化や公共の課題の設定に関わって認識の問題が重要となることも示唆しえた。このことをふまえて、共同性を原理とする授業実践を構築していく知の構造とそれに基づいた実践構想の論理を明らかにすることに挑戦していきたい。

「ケアの倫理」に基づいた実践を展開していく上では、ケアに内在する軋轢に翻弄され、傷つけられる機会を避けて通ることはできない。こうした状況を引き受けることのできる教師を育てる論理の解明と教師教育実践の構想もまた、重要な課題である

VI 主要参考文献

- Gudjons, J. : Gesellschaft und Erziehung – In Pestalozzis Roman „Lienhard und Gertrud“. Weinheim 1971.
- Horlacher, R. : Gemeinschaft und Gesellschaft – Das Verhältnis von Sozialphilosophie und Pädagogik bei Johann Heinrich Pestalozzi. In: Pädagogische Rundschau 55(2001), S.21-38.
- Klafki, W. : Pestalozzi über seine Anstalt in Stans. Mit einer Interpretation und neuer Einleitung von Wolfgang Klafki. (7. Auflage) Beltz Verlag, 1997 (邦訳 ; クラフキー著、森川直訳『<改訂版>ペスタロッチーのシュタンツだよりークラフキーの解釈付き』東信堂、2004年) .
- Oelkers, J. / Osterwalder, F. (Hrsg): Pestalozzi — Umfeld und Rezeption. Beltz 1995.
- Pestalozzi, J. H. : Sämtliche Werke. Kritische Ausgabe. Hrsg. von Buchenau, A., Spranger, E. , Stettbacher, H. Zürich 1927ff.
- Rosa, H. u. a. : Theorien der Gemeinschaft – zur Einführung. Junius 2010.
- Stadler, P. : Pestalozzi. Geschichtliche Biographie Band 2 – Von der Umwälzung zur Restauration. Zürich 1993.
- Tröhler, D. : Republikanismus und Pädagogik – Pestalozzi im historischen Kontext. Bad Heilbrunn 2006.
- Tröhler, D. : Johann Heinrich Pestalozzi. Bern 2008 (邦訳 ; トレエラー著、乙訓稔監訳『ヨハン・ハインリッヒ・ペスタロッチ』東信堂、2015年) .
- Young, I.M.: Justice and Politics of Difference. Princeton University Press 1990.
- Young, I.M.: Inclusion and Democracy. Oxford University Press 2000.
- Young, I.M.: Responsibility for Justice. Oxford University Press 2011 (邦訳 ; ヤング著、岡野八代他訳『正義への責任』岩波書店、2014年) .
- アレント著、志水速雄訳『人間の条件』ちくま学芸文庫、1994年。
- アレント著、志水速雄訳『革命について』ちくま学芸文庫、1995年。
- 池谷壽夫他著『競争の教育から共同の教育へ』青木書店、1988年。
- 長田新編『ペスタロッチー全集』全13巻、平凡社、1974年。
- 大阪保育研究所編『燃える放課後—主体的努力を育てる学童保育の実践』あゆみ出版、1982年。
- 岡野八代『シティズンシップの政治学—国民・国家主義批判<増補版>』白澤社、2009年。
- 岡野八代『フェミニズムの政治学—ケアの倫理をグローバル社会へ』みすず書房、2012年。
- 京都府生活指導研究協議会編『「Kの世界」を生きる』クリエイツかもがわ、2013年。
- 小玉重夫『教育政治学を拓く—18歳選挙権の時代を見すえて』勁草書房、2016年。
- 齋藤純一『公共性』岩波書店、2000年。
- 齋藤純一『政治と複数性—民主的な公共性にむけて』岩波書店、2008年。

佐藤学『学びの快樂ーダイアローグへー』世織書房、1999年。

サリヴァン著、中井久夫他訳『精神医学は対人関係論である』みすず書房、1990年。

杉田敦『境界線の政治学』岩波書店、2005年。

全生研近畿地区全国委員連絡会編『共同グループを育てるー今こそ、集団づくり』クリエイツかもがわ、2002年。

全生研常任委員会『学級集団づくり入門 第二版』明治図書、1971年。

全生研常任委員会編『新版 学級集団づくり入門<小学校>』明治図書、1990年。

竹内章郎『「弱者」の哲学』大月書店、1993年。

竹内常一「非行・校内暴力克服の視点とすじみち」『生活指導』第294号、明治図書、1981年12月臨時増刊、19-28頁所収。

竹内常一『子どもの自分くずしと自分づくり』東京大学出版会、1987年。

竹内常一他編著『教育と福祉の会うところー子ども・若者としあわせをひらく』山吹書店、2012年。

中西新太郎『情報消費型社会と知の構造ー学校・知識・消費社会』旬報社、1998年。

バトラー著、佐藤嘉幸他訳『自分自身を説明することー倫理的暴力の批判』月曜社、2008年。

バトラー著、佐藤嘉幸他訳『権力の心的な生ー主体化＝服従化に関する諸理論』月曜社、2012年。

花崎皋平『生きる場の哲学ー共感からの出発』岩波新書、1981年。

花崎皋平『<増補>アイデンティティと共生の哲学』平凡社ライブラリー、2001年。

ハーバーマス著、河上倫逸他訳『コミュニケーション的行為の理論<上>』未来社、1985年。

ハーバーマス著、河上倫逸他訳『コミュニケーション的行為の理論<中>』未来社、1986年。

ハーバーマス著、河上倫逸他訳『コミュニケーション的行為の理論<下>』未来社、1987年。

ハーマン著、中井久夫訳『心的外傷と回復<増補版>』みすず書房、1999年。

宮崎隆志「協働に基づくケア・コミュニティの意義ー排除型自己形成を超えるために」日本臨床教育学会紀要『臨床教育学研究』第6巻、2018年、20-34頁所収。

宮地尚子『傷を愛せるか』大月書店、2010年。

山本敏郎「生活指導における<公共>概念の再検討」『金沢大学教育学部教育工学研究・実践研究』第32号、2006年、1-12頁所収。

山本敏郎「教育と福祉の間にある教師の専門性」日本生活指導学会『生活指導研究』第28号、エイデル研究所、2011年。

唯物論研究協会編『唯物論研究年誌 第3号 教育・共同・平等』青木書店、1998年。

唯物論研究協会編『唯物論研究年誌 第5号 新たな公共性を求めて』青木書店、2000年。

唯物論研究協会編『唯物論研究年誌 第7号 所有をめぐる<私>と<公共>』青木書店、2002年。

唯物論研究協会編『唯物論研究年誌 第9号 親密圏のゆくえ』青木書店、2004年。

吉本均『学校教授学の成立』明治図書、1986年。

吉本均『教室の人間学』明治図書、1994年。

李静和『つぶやきの政治思想』青土社、1998年。